



ヤンキーは異世界で 精霊に愛されます。2

ALPHAOLTS

黒井へいほ
Heiho Kuroi

アルファライト文庫 

Moodtime loved
by the sprits.

CHARACTER 主な登場人物

アマリス (アマ公)
オルフェン王国の姫騎士で、グレイスの姉。後先考えない性格。

リルリ
グレイス付きのメイド。主人には従順だが、裏の顔も持つ。

コウヤ (坊ちゃん)
精霊解放軍の一人。イケメンだが、どこか残念。

真内零
目つきを怖がられるヤンキー。異世界に転生し、精霊に慕われまくる。

精霊達 (チビ共)
岩やマッチのような被り物をした精霊。零のことが大好き。

神 (メガネ)
零を異世界に転生させた張本人。細身の優男。

グレイス (ガス公)
オルフェン王国の第二王女。「あわあわ」するのが癖。

第一話 いや、俺はやばくねえだろ

俺——真内零まないぜろが変な眼鏡の兄ちゃんに異世界つつーとこに転生させられてから、どのくらい経たっただろう。

眼鏡の兄ちゃんはその自分のこと神だとか言ってたが、本当に胡散臭うさんくさい奴やつだった。

でも、あいつのおかげでチビ共と友達になれたわけだし、グス公たちにも会えたわけだ。一応そこらへんは感謝している。

チビ共は、この世界の精霊ってやつらしい。グス公が教えてくれた。

そういや、グス公って本名なんだっけな？ グレイス……だったか？ まあなんでもいいや。グス公はグス公だしな。

あいつがオルフェン王国の王女様ってのは、どうも納得いかねえ。いつも、あわあわ、グスグスしてやがるし。それを言ったら、あいつの姉ちゃんのアマ公……アマリス？ も暴走癖ぼうそうへきのある変な奴だしなあ。本当にこの国は大丈夫なのか？

グス公のメイド、リルリだけが頼りだ。腹が立つことも多いが、案外しつかりしてやがる。

……あいつら、今頃大変だろうなあ。

俺たちがリザードマン討伐を終えて、リザードマンの落とした黒い石と精霊解放軍のことを国王に報告したのが昨日のこと。

精霊解放軍つてのは、王族と敵対してて、人が精霊を使っていることが許せず、精霊を解放しようとしている奴らのことらしい。そいつらが扱っているのが黒い石で、触れた者の魔力を吸い上げる危険なものって話だ。

その黒い石をなぜリザードマンが持っていたのかは分からないが、リザードマンの棲み処に近い村で、精霊解放軍の奴らが検問みてえなことをしていたから、何か関連があるんだらう。

そんなわけで、グス公とアマ公は帰るなり黒い石と精霊解放軍の調査を進めることになった。

俺もそれを手伝うことになっていたんだが……結局、リルリの助言で城を出ることになった。リルリは、城の中枢に精霊解放軍が潜り込んでいると言っていた。だから俺の特殊性がバレれば間違いなく精霊解放軍に狙われるし、グス公たちが危険な目に遭う可能性も高くなる、と。

この世界の人間には見えないはずの精霊が、俺には見える。それは精霊解放軍にとって喉から手が出るほど欲しい力だ。

俺はグス公たちに迷惑をかけたくなえ。だからグス公とアマ公には何も言わずに城を出て、自分なりに精霊解放軍のことを調べることにした。

それに、あの黒い石を見たとき、チビ共はすげえ怖がってた。黒い石も精霊解放軍も、チビ共にとって悪いもんじゃ決まってる。俺はチビ共を悲しませる奴らを許せねえからな！
まずはチビ共と一緒にカーラトつつう町を目指す。そこで情報収集したら、チビ共と最初に出会った精霊の森に行つて手がかりがないか調べてみる。

その後は……まあ、そんときに考えるか。

——数日後。

運よく通りがかかった乗合馬車に乗れた俺は、カーラトの町に到着していた。

まあ言うまでもねえが、乗せてもらうのには苦労もあった。いつも目が怖えってビビラれている俺は、気を遣つてフードで顔を隠してたんだが、それでかえって怪しまれちゃった。でもまあなんだ、最後には誠意が伝わったっていうか、乗せてもらった。

……嘘だ。前乗ったときと同じ御者の人だったから、頼み込んで乗せてもらった。

ボソボソと「一緒にいた女の子がいない」とか、「人売り」とか言われてたみてえだが、たぶん気のせいだ。

最近耐えるということを感じた気がする。間違はなくあの三人のお蔭^{かげ}だろう。なのに、感謝よりもため息が出るのはなんで？ ……深く考えるのはやめておくか。

俺は、とりあえずエルジジイに会いに行くことにした。いや、他に知り合いもいねえしな。町は別段変わりもなく、俺は真っ直ぐエルジジイの作業場所みたいな家に辿^{たど}り着いた。

「おい、エルジジイいるか？」

「おお？ 若いの！ 久しぶりじゃのお！ 鉄パイプの調子はどうじゃー！」

「いや、そんなに経ってねえだろ…。鉄パイプは調子いいぞ」

エルジジイはキョロキョロと俺の周りを見ている。何か探してるみてえにだ。

「赤い髪の娘はどうした？」

「ああ、グス公は王都に置いてきた」

「む、そうなのか。それで、一人で僕^{わし}に会いに来たのか？」

一人。なんかその言葉は、一瞬胸に来るものがあつた。まあこれが何かは分かっている。

直^{じき}に慣^なれんたろ。

俺は胸に手を当て、疼^{うず}きを抑^{おさ}える。そして、そのまま話を続けた。

「ちよっと知りたいことがあるんだが、どうすりゃいいかが分からねえんだ」

「ほほう、知りたいことか。何じゃ？ 力になるぞ！」

エルジジイに聞く、か。その発想はなかった。情報屋みてえなのがいれば紹介してもら

おうと思ったんだが…。案外黒い石とかについて何か知ってるかもしれないねえ。どうもエルジジイは只者^{ただもの}じゃない感じがするんだよなあ。

「おう、それじゃあ聞くけどよ。黒い石について何か知ってるか？」

「何じゃそれは。知らん！」

気のせいだった。速攻で否定しやがつた。

どうやら俺には人を見る目がねえらしい。いや、目つきが怖^{こえ}えとか言われるせいでこれまであんまし人と接してこなかったんだから、あるわけねえか。

まあ今の感じを見ると期待はできなそうだな。一発で上手^{うま}くいくなんて、そんな話があるわけがねえ。

俺はそう思い、諦^{あきら}めながらも、一応次の質問をエルジジイにした。

「あー……。じゃあ、精霊解放軍^{せいりやうかいほうぐん}ってのは知ってるか？」

「知ってるぞ」

「ああそうか。ならやつば、とりあえずは森に行ってみるしかねえか」

「いや、知ってるぞ」

さて、森には明日向かうとして、今日は宿でもとるか？

——だが、この世界の金銭感覚みてえのが分からねえんだよなあ。そのへんのことば、グス公に頼^{たの}まっちゃったからな。野宿でもいいっちゃいいんだが……。

「で、精霊解放軍の何が知りたいんじや?」

「ああ、なんか安宿とか知ってつか? なるべく金を使わないで済ませてえんだが」

「ん? ならうちに泊まれ! 男一人くらい全然構わんぞ!」

「お、まじか? 悪いな。代わりに仕事でも手伝えばいいか?」

「む、そうじゃな。倉庫でも少し整理するかの。手伝ってもらえるか?」

「おう、お安い御用だあ」

俺はエルジジイと倉庫に向かった。この倉庫は懐かしいな。ここで今着ける鎧をもらっただよな。ついこの間のことなのに感慨深い感じがしやがる。

で、まあ汚え倉庫の中で同じ種類の武器を纏めたり、防具を一箇所に集めたり、ああだこうだして夕方まで整理作業をした。こき使われた感じもしたが、まあ一宿一飯の礼つてやつだ。

チビ共もこっそり手伝ってくれたが、途中からはどこからか持ってきた小さな剣と盾でチャンバラをし始めた。しょうがねえよな、剣とか見たら、男だったらテンション上がっちゃう。いや、こいつらの性別知らねえけど。

で、あつという間に夕飯だ。エルジジイの作った飯は、うまかった。うまかったが、手抜きだった。まあ、男料理つてやつだな。男だけだから構わねえが。

食後の茶を啜っていたら、エルジジイは不意に話を切り出した。

「なあ若いの。そろそろ流すのを止めてもらいたいんじやがな」

「ああ? 流す? 何をさだ?」

「いや、だから精霊解放軍の何が知りたいんじや」

は? 何言つてんだエルジジイは。精霊解放軍のことは……あれ? よく考えたら、知ってるって言つてた……か?

「エルジジイ知つてんのか!」

「いや、ずっとそう言つてたんじやが……」

エルジジイは、やつと話が通じたという顔をしていた。うん、悪い。知らないって決めて流してた。

年寄りとの会話はそこそこ流すのがコツだと、田舎の爺さんを相手して学んでたんだが、その先人観がまずかったな。本当に悪いことをしちまったと思うが、まあ勘弁してもらおう。悪気はなかったからな。

ともかく、知ってるなら話は早え。今欲しいのは、何よりも情報だ。

「そうだな、なんであいつらのこと知つてんだ?」

「武器を卸したことがあるからじやな」

「は? あんなやべえやつらに武器を売つたのか?」

おいおい、村でちらつと見ただけでも、あの黒づくめの奴らは危険だつて分かつたぞ?

……いや、よく考えたら、そうでもねえな。ただ黒いだけで、あっさり通してくれたか。けどなあ、それがバレたらエルジジイは王国に狙われたりするんじゃないかねえのか？ 何かやばそうな感じがするけど、平気なのかこれ？

そんな俺の気持ちなど露知らず、エルジジイは平然としていた。

「やばい？ ただ精霊を解放しようとしているだけじゃあ。そもそも武器なんてのは使う者次第じゃ。やばいというなら、お主にだって武器を渡せんことになるだろ」

「いや、俺はやばくねえだろ」

俺の前にエルジジイは無言で鏡を置いた。なんだこの、てめえの面を見直してみろと言わんばかりの行動は。

黙ってる俺を見て言い返せないのだと受け取ったらしく、エルジジイは頷く。納得いかねえな……くそが。

「十人十色と言ってるな。十人いれば十の色があるもんじゃ。考え方もそれぞれってことじゃな。別に、奴らは人間を皆殺しにしますとかって言ってるわけでもないじゃあ？ 精霊なんぞいなくても、生活はできるからのお」

エルジジイの考えは俺に近いもんだ。確かに精霊のいない世界から来た俺からすれば、精霊がいなくても……つまり魔法なんか使えなくても生きていけると思える。

でも、この世界の住人でそう考えてる奴に会ったことはなかった。……いや、いたな。

精霊解放軍はそう考えてるから行動してるんだ、たぶん。

つまりなんだ？ あいつらは悪い奴らじゃねえのか？ また分からなくなってきた。

「若いのお、お主は少し変わってるな」

「ああ？ 変わってる？」

「うむ。普通の人ならば、精霊解放と言われたら悩みもせずに否定する。だが、お主は悩んでおる」

「まあ、そりゃ色々な……」

「別に事情を聞く気はない。僕にも、王国と精霊解放軍のどちらが正しいのか、あるいはどちらの間違ったのか、そのあたりはよく分からん。なので最初から善悪を決めつけるのではなく、色々な話を聞いて判断したらどうじゃ？ お主はそれができる人間じゃ」

色々聞いて決める。確かにそれは大事かもしれないねえ。

この世界では、エルジジイみたいにどちらが正しいかを決めない人は少数派だ。

大多数は王国を支持していて、残り少数が精霊解放軍みたいな考えなのかもしれねえ。……いや、それすらまだ俺には分からねえ。

やることの一つが決まった気がする。それは、色々なところに行って色々な人の話を聞く。これだな！

「ありがとな、エルジジイ！ 少しやるのが分かった気がするぜ！」

「お！ そうか！ そりゃ良かったのお！」

「おう。それで、他に何か精霊解放軍の情報はねえのか？」

「ふむ。そうじゃなあ……。大精霊がなんとらとか言っていたかのお。後は知らん」

「大精霊ってなんだ？」

「知らん！ 俺は鍛冶かじ以外のことには興味がないからな！」

なるほど。頼りになるが、肝心なところで頼りにならねえ。

……でもまあ、すげえジジイだな。俺は嫌いじゃねえ。

つと、そうだ。まだ聞きてえことがあるな。

「精霊解放軍の居場所は知ってるか？ 後は、ボスとかも知りてえな」

「居場所は知らん。武器はこの店に来て依頼して、できた頃に取りに来ていたからな。そいつらは黒いローブを着けていて、顔すら分からなかった。ボスなんでもっと分からん」

「いや、そんな怪しい依頼受けんなよ……」

「別に怪しくはなかったぞ？ 依頼のときに脅おびされたわけでもないし、報酬もしつかり払ってくれたしのお。武器や防具を欲しがる奴は、身元を明かしたがる人でもない者も多いから、しょうがないじゃろ」

そんなもんなのか？ なんか、人の命を奪うばうもんを作ってるつつうのに軽い気が……いや、違ちがいな。

さつきエルジジイは言っていた。武器は使う奴次第だって。作ったエルジジイに非があるわけじゃねえな、うん。

バットだつて野球の道具なのに、それで人を殴なぐる奴が悪いわけだしな。

使う奴次第、か。なんか大事なことを学んだ気がする。

俺は、間違った使い方をしたらいけねえ。そう思いながら、ぎゅつと鉄パイプを握にぎった。

とりあえずだが、少し目標がしつかりしてきた気がする。

まずは精霊の森。その後は色んなところに行つて情報を集めつつ、自分で見て決めるしかねえってことだ。

なんか、冒険っぽいよな。少しわくわくしてきやがった！

俺はチビ共と地図を見ながら、こんなところに行つてみるのはどうだろう？ こっちもよくねえか？ とか話しながら、その日は眠りについた。

第二話 うぜえ、やつぱり埋めるか

朝はエルジジイと飯を食って、昼飯用の弁当と干し肉ほをもらった。さらに饞別せまべだとか言っ

て、黒いマントまでもらっちゃまった。悪いな。

「じゃあ行くか。世話になったな、また来る」

「いつでも来い！」

エルジジイとの別れはあっさりしたもんだった。……でも、俺にはそれが心地よかった。

俺はチビ共と町を出て、南東の精霊の森へと向かった。

外はいい天気で、散歩気分です歩いて行くことができる。

あー、こういうのいいよな？　なんか、のんびりできる。馬鹿な奴らが泣きわめくことも、怒鳴りつけてくることも、皮肉たつぷりに笑われることもねえ。

だが、そこには少しだけ寂しさもあった。……ちつ、騒がしいのに慣れすぎちゃまったな。元々俺は一人だったんだ、戻っただけだろ。

そう考えていると、俺のズボンの裾がぐいっくいと引つ張られた。

ああ、悪い悪い。俺は一人じゃなかったよな！

訴えかけるチビ共の頭を撫でると、嬉しそうに笑ってくれた。へっ、本当に気のいい奴らだ。

特に魔物に襲われたりもせず、俺は順調に森へと辿り着き、中を進んだ。

道に迷うこともなく森に入ったが、聞いた話によると、普通の奴は精霊の森を見つけれないらしい。俺は迷ったことがねえだけだ。なあ。

一体どういう絡繰りかは、よく分からねえ。チビ共と一緒にのが関係してるのかもしれないな。まあ、とりあえず俺は迷わないってことが分かった。それだけで十分だ。

木漏れ日の中を歩き、俺はチビ共と過ごした洞窟へ行き着いた。

あの頃と何も変わっていない。まるでここだけ時間が止まってるみてえだ。そんなに時間は経ってないのになぜか懐かしく感じちゃうが、そんなものかもしれないねえ。

ひとまず今日はここに泊まる。俺は野宿の準備をし、周囲を探索することにした。なんとなくだが、ここには何かがあるんじゃないかねえかと思っただから。

まあ何よりここは居心地がいいんだよなあ。空気が澄んでるっていうか、力が湧いてくるっていうか。不思議な感じだ。

一通り泊まるための準備を済ませ、気分がいいまま周囲を探索する。が、特に変わったこともなければ、おかしなものもなかった。つまり、何も手がかりなしってことだ。

ううん、何かあると思っただがなあ……。

とりあえず、洞窟の前に戻ってチビ共に話しかけた。

「なあチビ共、何かここに変わったとこってねえか？」

「あるがな」

「お、そうか？ ならそこに案内とかしてくれっか？」

「案内というか、ここが変わってるがな」

「……ん？ がな？」

聞き覚えのない声に気づき、俺は慌てて振り返った。

そこにいたのは、岩みたいな着ぐるみを被ったおっさんだ。チビ共と似たような格好で察しはつく。精霊に憧れる変質者だ。

「お、やっと気づいたがな」

「おらあー」

俺は問答無用で鉄パイプで殴りつけた。

変態だ、間違いねえ！ チビ共には手は出させねえぞ、くそが！

「おら！ てめえここで何してやがる！」

「ちよ、いたつ。やめつ、やめるがな！」

「うるせえ！ チビ共危ねえぞ！ 離れてろ！」

くそつ。案外固え！ 手足を亀みたい^かに岩の中に引っ込めてるせいで、効果的なダメージを与える気がしねえ。

何かいい手はねえか……？



そうだ。ちようどいいもんがあるじゃねえか。

俺は野営用に用意しておいた薪たきぎに、火打ち石で火を点けることにした。叩いて駄目なら、燃やすしかねえよなあ!!

カチツカチツカチツ。

火が点かねえ! 待つてろよ! 今すぐ火だるまにしてやらあ!

「待つがな! 本当に待つがな! 火は熱いがな!」

「熱くないと意味がねえだろ!」

「落ち着いて話し合うがな!」

「変質者と話すことはねえ!」

「私は土の大精霊だがな!」

ピタリと、俺は手を止めた。

大精霊? そんな話を確かにエルジジイから聞いた。

なんだったか? 精霊解放軍が何か言つてたとかつて……こいつが? どう見ても変質

者だろ。

俺がチビ共を見てみると、頷いている。……なるほどな。どうやら俺の意見に賛成みてえだ。

カチツカチツカチツ。

「嘘だな。待つてろ、すぐ燃やしてやらあ!」

「待ーつーがーなー!」

火が点いたところで、俺はおっさんとチビ共に押さえられた。

ちっ。後少して火だるまにできたのによお。油とかねえか? 油をぶっかけたら、より

効果的じゃねえか?

「まだ物騒ぶつそうなことを考えてるがな? 落ち着いて欲しいがな! 話し合うがな!」

「がながなるせえ! てめえが大精霊だつて証拠はあんのか!」

「しよ、証拠?」

俺は慌てている変質者に無言で火の点いた薪たきぎを構えた。

変質者は焦りながら、両手だけでなく全身を使って無実だとアピールしてやがる。そんなことで油断はしねえけどな。

「待つがな! 本当に待つがな! 証拠ならほら、精霊と同じ格好してるがな!」

「同じだあ? 胡散臭うさんくささしかねえだろうが!」

「ほ、本当だがな! 頼むから勘弁して欲しいがな!」

……どうやら本当に危害を加える気はねえみてえだな。

とりあえず、俺は火の点いた薪たきぎを焚たき火びの中に戻した。すぐ手を伸ばせば取れる位置だけだな。

だが、こいつが大精霊だとは信じられねえ。絶対に変質者だろ。疑いはこれっぽちも晴れていねえが、話くらいは聞いてやるか。

「まあ一応話は聞いてやる。だが嘘臭かつたら燃やすぞ」

「分かったがな！　ありがとうございますがな！」

仕方なく、俺は火の近くに座った。

恐る恐るだが、同じように変質者も座る。びくびくと怯えた目をしているが、こっちの油断でも誘ってんのか？

それに、かなりげっそりしてる気がする。たぶん森で迷子になったかなんかで、碌なもん食ってねえんだらう。まあ悪い奴じゃなかったら、飯くらいは食わせてやるか。

「で、てめえは何者だ」

「土の大精霊だって言ったがな!」

「……まあそれじゃあそんな感じで、一応話を続けるか」

「まったく信じてないがな!」

半泣きになりながら変質者は話を始めた。

それよりも、岩から見えてる足のすね毛が気になる。いや、綺麗に剃られてたらそれはそれで腹が立つんだけどな。

「あ、そ、そうがな。証拠といえは、ここは精霊の森がな」

「おう、そうらしいな」

「人間は入って来られないがな！」

「ダウトだ。俺は人間なのに入ってるからな、死ね」

俺は躊躇わず火の点いた薪を掴み、構えた。

変質者は飛び上がり、俺から距離をとって必死な形相をしている。

「待つがな！　待つがな！　零が入れたのには理由があるがな！」

「理由？　なんだそりゃ？　後、なんで俺の名前を知ってたんだ」

「零のことはここに住んでたときから知ってるがな。それと理由は、零が特別だからがな！」

俺がここに住んでたことを知ってる？　怪しい。

なのにチビ共は、変質者に懐いてる感じがする。もしかして悪い奴じゃねえのか？　……いや、騙されてるだけな気がする。やつぱり話次第ではぶつ飛ばそう。

俺はそう心に決めながらも、一応薪を元の場所に戻した。

「で、俺が特別ってのはどういうことだ」

「なんで自分に精霊が見えるのか、考えたことはないがな？」

「神様とかって奴がくれたスキルだろ」

確か、あのメガネは『精霊に愛されし者』つつーやつを俺にやるとか言ってたと思う。

「違うがな。スキルはあくまで本人の資質によるがな。資質を最大限まで伸ばしたのがス

キルで、資質がなければスキルは得られないがな」

あ……つまりなんだ？ できることしかスキルにならないってことか。ってことは、あのメガネは、俺の素質ってやつを伸ばしたってことになるのか？

「まあそういうことだがな。だから、零には精霊が見えてるがな」

「ああ？ 俺は何も言ってるねえぞ？」

「人の表層意識くらいなら読み取れるがな！ 大精霊だがな！ 見直したがな？」

「うぜえ、やっぱ埋めるか」

「埋める!? やめて欲しいがな！」

こいつはどうやら本物みてえだ。チビ共の反応や、こいつの特異性を考えれば納得できる。だが、見た目はやっぱ胡散臭い。これもきつと読み取ってんだろ。てめえ怪しいぞ。

土の大精霊は、どうやら本当に俺の考えてることが分かるらしい。俺を見ながら、結構へこんでやがった。

「まあ分かった。一応信じた。で、何か用か」

「用？ 用があるのは零のほうじゃないがな？」

「ああ？ 変質者に用はねえ」

「本当にいいがな？」

……よくねえな。こいつは何かを知ってんだろ。直感だが、そんな気がする。

ちゃんと聞いておくべきなのかもしれねえ。すげえ聞きたくねえけどな。

「俺の質問に答えてくれんのか？」

「答えられることだけになるがな」

「分かった。ならまず、精霊ってのはなんだ？」

「おお、いい質問だがな。精霊とはこの世界の維持に必要なものだがな」

なるほど、分からねえ。酸素みたいなもんか？ さっぱり分からん。

俺の心を読み取ってるからなのか、疑問が顔に出てるからなのかは分からないが、土の大精霊は偉えちそうな顔をして腕を組んだ。

「精霊がこの世界の魔力を生み出してるがな。これなら分かるがな？」

「は？ 待って待て。精霊は魔法が使えねえんだろ？」

「魔法は魔力がないと使えないがな。つまり精霊がいなくなれば、魔法は使えないがな」

「お、おう」

やべえ、どんどん分からなくなってる。

精霊がいないと魔法が使えない？ いや、グス公は精霊と契約してなくても使ってたよな。なら、いなくても使えるんじゃないやねえか？

「まあ今はなんとなく理解すればいいがな。この世界に魔力があるのは精霊のお蔭かげ。精霊がいなくなったら魔力がなくなるから、魔法が使えなくなるがな。オッケーがな？」

「おう、オッケーがな」

やべえ移った。土の大精霊はニヤニヤ笑ってやがる。

俺が鉄パイプを握ると、笑うのをすぐにやめた。最初から大人しくしてろ。

「で、今は世界の魔力が乱れてるがな。このままじゃ、世界から魔力が消えるがな」

「待って待って待って。今、一気に話が飛んだよな？　なんで世界の魔力が乱れてんだ！」

「それは自分で調べるがな」

「お前が知らねえだけだろ！」

おい、なため息ついてんだ。この野郎、本当に俺に教える気があんのか？

なんかイライラと……しねえな。あれ、なんで？

すぐに気分が落ち着いて、俺はこいつの話を聞こうって気になってる。信じてみていいかもしれない……と思えてきた。こんなに怪しいのに、だ。わけが分からねえ。

「零、いいがな？　残り三体の大精霊に会うがな。で、黒い石が何か、精霊解放軍がなぜ

あんなことをしているかを調べるがな。それから最後に一番大事なことを言うがな」

「おいおい、そんないきなり色々言われてもよお。……ん？　一番大事なことだ？」

「自分が何者かを知るがな」

……自分が何者か？　俺は俺だろ？　こいつは何を言ってるんだ？

それとも俺には何かがあるのか？

「よく考えるがな。今までも自分に人と違うことがあったはずだがな。それはなぜなのか、自分は何者なのか。それが分かったときに……決めるがな」

「決める？　おい、何を言ってるんだ！　わけが分からねえぞ！」

「東に土の大精霊、私^ががな。そして、南に火の大精霊、西に風の大精霊、北に水の大精霊。覚えておくがな？」

「いや、だからそれがなんだって……あれ？　チビ共には木や花みてえなの被ってる奴もいるし、氷とか雷とかの魔法もあるよな？　それはなんなんだ？」

「それは全部四属性からの派生^{はせい}だがな。基本の四属性の大精霊が、派生したのもも統括^{とうかく}してるがな」

んん？　つまり氷は水の大精霊の仲間ってことか？　雷とかはどうなんだ？　分からねえ。

そんなことを考えているうちに、土の大精霊は、いつの間にか俺の目の前にいた。そして、そつと鉄パイプに触れる。

おい、なに勝手に触ってるんだ！

振り払おうとした時、土の大精霊の指先から淡い^{あわ}光が出て、鉄パイプの先に四つの穴が空いた。

俺が首を傾^{かし}げて見ていると、土の大精霊が穴に触れる。すると、茶色い石が穴にはまった。

なんだ、これ？

「精霊を救うために、大精霊の力が必要だがな。全ての大精霊の力を手に入れて、祭壇に捧げるがな」

「祭壇？ いや、そこじゃねえ。チビ共を救うってどういうことだ!?」

俺の問いかけには答えず、土の大精霊はにっこりと笑った。いや、おっさんに優しく笑いかけられても嬉しくもなんともねえんだが……。

よく分からねえから、俺は土の大精霊を睨みつける。だが、土の大精霊は見る見るうちに姿が薄くなっていた。

「お、おい！ なんか薄くなつてねえか!? まだ話は終わってねえだろ！ 他のことはどうでもいいが、チビ共を助けるってことについて言え！」

「分かったがな？ 大精霊に会うがな！ そして自分が何者なのかを知るがな！ また会える日を楽しみにしてるがな」

「待ってて言うてんだろ！」

……消えた。そう、段々薄くなったかと思ったら、そのまま消えた。まるでそこには最初から何もいなかったみたいでえに、だ。

チビ共は消えたところをじっと見ている。

俺が決める？ 何をだ？

この世界に來たのは偶然じゃなかったってことか？ あのメガネも、何か隠してやがるのか？

何も分からないまま、さらに分からないことが増える。

俺はただ、呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

第三話 こんなところで何してんだてめえ！

……いや、立ち尽くしていても駄目だ。

わけ分からねえことはたくさんあったが、分かったことも多かったはずだ。とりあえず、分かったことをメモするべきだな。

メモ帳とペンは、リルリが俺のために用意してくれた袋の中に入っていた。あいつはほとんどだけ便利なんだ。

その日は洞窟に泊まることにして、色々とこれからのことをまとめてみた。

・黒い石のことを調べないといけない。だが、まだ情報はない。

・精霊解放軍の目的をしっかりと知る必要がある。精霊を解放することに理由があるってことか。

・精霊ってのは何か大事なもんだ。いないと魔法が使えなくなる。
 ・世界の魔力が乱れる。よく分かんねえ。
 ・大精霊に会う必要がある。東西南北に一体ずついる。会うと何か分かるってことなんだろう。

・チビ共に何かあるのかは分からないが、やべえらしい。助けるためには、大精霊に会う必要がある。

・俺には何かがあるらしい。俺のことを知らないといけぬ。今までもヒントがあつたみてえだ。そして何かを決めないといけぬえ。

……こんなところか。

俺は茶色の石がついた鉄パイプを見たが、当然何も答えてはくれなかった。

大体まとめ終わったので、次の目的地を決めることにした。動けばなんともなるだろう。

この精霊の森は、地図によれば大陸の南東に当たる。で、土の大精霊とかいう変質者は東の大精霊だった。なら次に近いのは南か。

「うっし。南に向かうか」

そう決めて寝ることにした。今日はもう夜遅い。今から動くのは馬鹿のすることだ。

南にも町があるみてえだし、地図を見る限りだと山が多い感じか？

……まあなんとかならあ。

——朝、起きて身支度みじたくを整えた。

チビ共もやる気満々だ。俺に目的があるのが嬉しいらしい。俺と同じように荷物を背負っているが、もしかして真似まねしてるだけじゃねえよな？

段々、こいつらの考えてることが分かってきた……と思う。長く一緒にいるからだと思つてたが、もしかすると、これにも何か理由があるのかもしれない。

まあとりあえずは南だ。俺は森を出て、昨日通った道をまた歩きたした。

途中に分かれ道があるからそこまで戻って、南に向かう方角へ進めばいいだろう。つてことで、分かれ道まで歩いてたんだがな。

なんか、聞き覚えのある声がかつちに向かってくる。前にもこんな展開があった。

「た、助けてください！ 誰かあ！」

赤い髪に赤い目。セミロングっぽい髪に少し低めの身長。

確認するまでもねえ。顔を真っ赤にしてせえせえと息を上げて走って来ているのは、間違いないグス公だった。

「ちよつと止まれや。こんなところで何してんだてめえ！」

「零さん!? ひっ！ こっち見ないでください！ 久々なので慣れてません！ 後、助け

てください！」

グス公は息も絶え絶えという感じにもかかわらず、素早く俺の後ろに隠れた。

こいつは……。

俺は仕方なくグス公の来た方向を見る。ゴブリンが五体ほど意気揚々と追いかけてきていた。

うん、この展開も知ってたな。

「おい！ てめえ精霊と契約して強くなつたんだろ！ なんで逃げてんだ！ 焼いちまえばいいだろうが！」

「焼きました！ すっごい焼いたんです！ 十体以上倒したんです！ でも魔力がほとんどなくなっちゃいました。えへへ」

「えへへ、じゃねえ！ もうちよつと考えて使えや！」

もう、なんなんだこいつは……。

俺は頭を抱えたい気持ちを抑え、とりあえずゴブリンをどうするか考えた。

五体か。まあなんとかできるだろ。どうぶつ飛ばすかが大事だな。さてまずは……。

「零さん！ 何してるんですか!? もう来ちゃいます！ 逃げるんですか!? そうですよね！ 逃げましょう！」

「うるせえ！」

俺はグス公の頭を叩いた。この感じすら懐かしい。

グス公は涙目になりながら、不服そうに俺を見ていた。知ったことか。

で、なんだ？ 俺が逃げる？ ふざけやがって。

「逃げるわけねえだろうが！ ぶつ潰すに決まってる！ てめえは残った魔力で、できる

だけ弱え火を飛ばして援護しろ！ 俺には当てんなよ！」

「流石、脳筋ですね！ 分かりました！」

てめえに言われたくねえ！

俺はその言葉を返す時間すら惜しんで、ゴブリンに向かって走った。

相手は五体。全員が斧やら剣やらを持つてる。だが、動きはそこまで速くねえはずだ。

何度かやりあって、奴らのことは分かってる。

まずは……石斧をぶん投げる！

「ぐげっ!?」

おし、一番前の奴の体勢が崩れた。追いかける側だからって、調子に乗って集まって走ってるからだ。

前の奴が石斧を食らって後ろに倒れると、そいつのせいで他の奴の動きも止まる。

で、次は……鉄パイプをぶん投げる！

「ぐぎゃっ!? ぐぎゃー！ ぐぎゃっ！」

いいぞ、グルグル横回転しながら向かっていった鉄パイプが二体をぶつ飛ばした。その間に距離を詰めた俺は、振り返って仲間の方を見ている馬鹿の顔を拳でぶん殴る。

さらに、俺に気づいて慌ててるもう一体も蹴り飛ばした。

後はこいつらの石斧二本を拾って、一本は投げる！ もう一本で倒れてる奴をタコ殴りだ！

「おらおら！ どうしたさっきの威勢はよ！ ははは！ ぶつ殺すぞおらあ！ ……グス公！ 援護はどうした！」

「ひっ！ 今しませぐめんさい！」

ちっ。喧嘩の雰囲気吞まれて動けなくなる奴つてのはよくいるからな。声をかけてみれば案の定だ。

さて、二体はポコポコにした。残りは三体か。

俺は足元に落ちていた鉄パイプを拾った。ポコリながら拾える位置に移動しておいて正解だ。

肩に鉄パイプを乗せ、ゆらりと立ち上がった俺は三体のクソ共を見た。

相手もやる気満々みてえで、こつちを見てやがる。だが、俺はあえて視線をすぐに逸らした。

それで俺がビビッてると思ったのか、三体は馬鹿みてえに真っ直ぐ突っ込んでくる。計

算通りだ。

距離が縮まる、近づく、目の前まで……そして、俺は三体を見た。思い切り目に力を入れてガンつけてやると、ピタリ、と奴らの動きが止まった。今だ！

「グス公！」

「任せてください！」

俺はグス公の魔法の射線から外れるように、横へ飛ぶ。

その瞬間、後ろから火の球が飛んできた。その火球がゴブリン一体の顔面に当たり、ぶつ飛ばした。

さて、残りは二体。俺は鉄パイプで自分の手をぼんぼんと叩きながら近づく。

おいおい、なにビビッてんだ？ 面白え顔してんじゃねえよ！ まずは手近にいる一体からポコポコにするかあ！！

……まあその後は消化試合みたいなものだった。ポコポコにした一体を、もう一体にぶん投げて、抱き合って倒れるところを二体まとめてポコった。それで終わりだ。

だが、一番の問題はこいつらのことじゃねえ。

「えへへ、やりましたね零さん！ チームワークの勝利です！」

俺は何も言わずにグス公の頬を捻り上げた。何がチームワークだ、このドアホが！

「いひやい！ いひやいです零さん！ しゅつぎよくいひやいです！」
 「うるせえ！ なんてでめえがここにいんだ！」

「いひやいでしゅつて！ とりひやえず放してくだしやい！」

ちっ、仕方ねえ。話を聞かないとしようがねえしな。俺はグス公を解放してやった。

グス公は半泣きで赤くなつた頬を撫でている。口を尖らせて頬を膨らませているし、不
 服に思つてるのは明らかだ。

「で、もう一回聞けど。てめえはここで何してんだ」

「零さんを追いかけてきました！」

「そうか、帰れ」

「ひどくないですか!？」

こいつは一体何を考えてんだ。色々城で忙しくなるんじゃないのか？

第一、俺がなんでこいつを置いて一人で出てきたと思つてんだ。

アマ公も大騒ぎだろうし、リルリも真つ青になつてんじゃねえか？ ……いや、リルリ
 は顔色一つ変えてないかもしれねえな。

「そもそも、なんで俺がいるところが分かつたんだ」

「計算しました！」

「はあ?」

グス公は胸を張つてドヤ顔してる。うぜえ。

「零さんは、この世界のことには詳しくないですよね？ だから、まずは一度行つたことのある場所に向かう可能性が高いと考えられます。となると、城の南門を通つたはずです。南門辺りで聞き込みをしたら、零さんらしき人が王都を出たことが分かりました。やはり私と行つたカーラトの町を指すことにしたのでしょうか。エルジーさんがいますからね。知つてる人を頼るのは当然です。カーラトに立ち寄つた後は、精霊の森にも行くはずだと思ひました。ということで、零さんを探しに森まで向かつている途中で、今の状況になつたんです」

待て待て、長え。つまりどういうことだ？ 俺の行動を予測した？ この馬鹿が？

……ありえねえだろ。なんでそんなことをできる奴が、ホイホイと俺を追いかけて来て
 ゴブリンに襲われてんだ？ リルリにでも聞いた可能性が高えな。

「ところで零さん。なんでこんなところに一人でいるんですか？」

「ああ?」

「もうやだなあ、迷子ですか？ まあ私がいるからもう大丈夫ですよ！」

「いやお前、何言つてんだ？ 俺には俺で考えることががだな……」

「そうですよね、分かります。じゃあこれからどうしましょうか？」

「いや、だからお前は城に帰れって」

「そうですね。分かりました、行き先は零さんにお任せしますね。でもこれからはちゃんと私に言ってから出かけてくださいね？ 今回みたいに零さんが迷子になってしまうと困りますから」

あれ？ なんかおかしくねえか？ グス公は笑顔なんだが、目が笑ってねえ。そもそも話が通じてねえ気がする。

俺は背筋にゾワツとしたものを感じた。やべえ、なんかこれはやべえ。どうする？ 逃げるか？ グス公から逃げる？ なんで？ いや、だがこれはやべえ。

「お、落ち着けグス公。とりあえず俺たちには、話し合いが必要だと思わねえか？」

「そうですね、今後のことも考えて私たちには話し合いが必要ですよ！ 今後とか……もうやだ零さんったらー！」

「お、おう。今後って言ったのはためえだけだな……」

「ふふふ、零さんったら零さんたら零さん零さん零さん零さん」

やべえ。本当にやべえ。誰か助けてくれ。チビ共はすでに周囲にいない。森の木の陰に隠れてる。俺もそっち側に入れて欲しい。

この状況はどうしたらいいんだ？ と、とりあえずだ……。そうだな、殴るか。

俺はグス公の脳天にチョップを入れた。かなり強めにだ。

「おらあ！」

「痛い！ 何するんですか!？」

お、目に光が戻った。なるほど、ゴブリンに襲われてテンパってたんだな。これできとりあえず一安心だ。

「まあなんだ、お前は城に帰れ。俺にはちよつとやる事ができてな」

「殴ったことはスルーですか!？ もう……私も零さんについて行きますよ」

「いや、それはまずいだろ。お前も城でやることとかがだな……」

「大丈夫です。許可はとってあります！」

「許可？ あの陛下がよく許したな」

「……ほら、こないだのリザードマン討伐の功績が認められたんですよ！」

「ああ、なるほどなあ」

なんか妙な間があつたような……気のせいかな？ まあ許可がとれてんならいいだろう。……いいのか？

若干変な感じもするし、無駄な時間を使っちゃまった気もする。だがまあ、考えても仕方ねえ。

俺はまたグス公と旅をすることになった。

第四話 聞いてんのか？

俺はグス公とチビ共を引き連れて南へと向かおうと思っていたんだが、グス公に言われて立ち止まっていた。

「カーラトの町まで戻って、乗合馬車で行ったほうがよくないですか？」

「てめえがいなければそうしてたかもな」

「うっ……。だ、大丈夫です！ 我慢します！」

「できねえからやめとけ」

グス公はすげえ乗り物酔いよをする。王族専用の馬車以外だとダメらしい。面倒くせえ。

なので当然のように、俺たちは徒歩で向かうことになった。チビ共に酔い止めの薬を作ってもらうつつう手もあるが、まあ اونびり行くのも悪くねえ。というか俺はわりと好きだ。道すがらグス公にこれからの目的を話すのも、他の奴がいなぶん、楽だしな。他人に聞かれたらまずそうな話題もあるからなあ。

「おうグス公。今後の予定についてなんだが……」

「零さんについて行きます！」

「いや、そうじゃなくてだな。これからどこに行くかなんだが……」

「零さんについて行きます！」

とりあえずぶつ叩いた。なんか、こいつおかしくなってるねえか？ 妙に俺との距離ちぢも近えしな。正直暑苦しい。

殴れば元に戻るが、段々その時間も短くなってきてる気がする。本当に大丈夫かこいつ？

「で、まあ俺らは南に向かう。火の大精霊って奴を探すためだ」

「大精霊？ 聞いたことがないですけど……」

「ああ、俺の知る限りでは変質者だ。だが、かなりできる変質者だ」

「精霊じゃないんですか!？」

いや、お前もあれを見たら間違いないと思うぞ。あれは紛れもなく土の大精霊まじだった。正直、次の大精霊に会うのが心配になるくらいにな。

グス公はころころと笑っていて、特に行き先に疑問はねえみたいだ。物分かりのいい奴で助かる。

「で、精霊解放軍がなんであんなことをしてるかとか、黒い石のこととか。何かそつちで分かったことあんのか？」

「え？ すぐに城を出た私が、そんなこと分かるわけじゃないじゃないですか」

「使えねえ……」

立ち読みサンプル はここまで